

同八十

「現見東方証法衰微教多隱没ノ北方証法猶増盛故。」

これらの記述によれば、上座すなわち執勝は当時、年老いて東方地域を教化していたことがわかる。

セイロン等の伝では、説転部と説経部を区別する。これは東晉に訳された舍利弗問經と同じである。

異部宗輪論および三論文義は異名と解する。舍利弗問經は、経量、欽光は上座より出たとし、異部宗輪論とは異っているが、南海寄帰内伝が上座を三つに分け、有部が四つに分けている説に近い。今はかりに記述し将来の考証を期待する。

Nāmarūpasamāsa ㊦

心心所相應論の考察

勝 木 太 一

1

Nāmarūpasamāsa は、ケーマ尊師によって著わされたもので、俗に巴利九註といわれるものの一書である。この書にはどうも二系統の写本があったらしいが、本書の成立年代は、内容かみて、Abhidhammasaṅgaha に近いことから Anurada と同時代か、それ以後と考えられ、およそ5〜6世紀初め頃とみてよいだろう。この書の有す意義は89心の分類定義と、心作用による分類を詳細に定義している点で、名色の關係を明確にするためのものと考えてよい。また言語による内含や同義異音についても詳しくのべているが、これは他の八註には見出しがたいもので注目しうるものである。

2

Nāmarūpasamāsa は前半部分で89心の分類を

- ① 欲界・色界・無色界・出世間界
- ② 色等起・威儀路
- ③ 無因・一因・二因・三因
- ④ 善心・不善心・異熟心・唯作心
- ⑤ 転向・見・触・領受・推度・確定・二住立・三住立・四住立・五住立・結生・被所縁・笑・有分・死

のように様々な角度からけんとうしている。その中で rāsi (『khaṇḍha』による分類は、他書にはあまり見られないもので、特に心所との相應を明確にするためになされたものである。この心々所相應は「Abhidhammavāṭāna」もかなり詳細にのべているが、Nāmarūpasamāsa はいわば、rāsi によるカテゴリー分類のあとに「語を決定しているもの」というように④純粹語 ㊦区分されるもの ㊦区分されぬもの。と分けて、本質を明確にしようとしている。

パリーの教理では52心所以上を数えられるが、このような Nāmarūpasamāsa の心所のべ方は、Abs. や Visn. には全くみられないものである。それは心の作用をふまえて、その成立の本質がどこにあるかという認識論的問題をテーマとするという態度によっているといえよう。すなわち、Nāmarūpasamāsa は心心所相應の問題を中心として、その成立の形態の様相を述べているのである。その観点は「法」の論理性の立場を考えるものでなく、認識主体のその作用をなさしめるカテゴリーを探究しようとするものである。しかし、そうはいってもやはり nāma は受想行識と同義であるかぎり、色との結合によって認識を成立せしめるものであるから、そのような主体的認識の成立を決定するものがどのようなものであるかというテーマは中心としてすえられていてもおかしくないのである。

3

Nāmarūpasamāsa が心の分類によって89心の性格を明確にしようとしたことは、さらに心所とのつながりを考慮してのことである。これは善心所では17のカテゴリー (rāsi) の分類で心所の性質を明らかにし、各心にどの心所が相應しているかを述べている。

この17のカテゴリーに教えられた56心所と略された心所4心所の60心所が、89心のうちのどの「心」に相應し、その心の相應する心所がどのカテゴリー (rāsi) に入るかを分析しているのが、Nāmarūpasamāsa の心心所論のテーマである(注一)。この17の rāsi によって、それぞれの心に相應する心所を撰して明確にされている。ここで一例として「喜俱智相應無行」(注二)心についてまとめてみよう。表にまとめたものを見ると、「喜俱智相應無行」心に相應する心所が、30法であることがのべられ、その30法をカテゴリー別にして重復を明確にしている。即ち、区分されるもの「心より慧」の12は重復を数えて38で、「区分されぬもの」が、30法の純粹語の残りの18であり、全てで56となり、省略されたものを入ると60心所となる。さらに「不定で略されたもの」を加えると65心所となる。

この省略された9心所は「聖典」に省略されたもので、法集論には見いだせないも

のである。Attasālini p. 108 に「仏陀は心の支分として50以上の法を示し、またという語で他の9法を示した」とされ、これが「省略されたもの」といえるものである。これは、善法をなさんとする欲・勝解・作意・中捨で、Vism (p.463) に見られるように、これらは一諸に生起するものでなく順次に生ずるものである。また、悲以下の不定5心所については、「或者は慈も捨も不定心所であると主張する」とVism. に述べられているが、これは慈≡無瞋、捨≡中捨としりぞけている。この慈捨の不定心所とすることは、おそらく梵住の分類よりきたものだろうが無畏山派の主張であらう。

「捨俱智相応無行」については、劣喜性であるので、「純粹語」の「喜」にかえて「捨」をいれている。中捨≡捨という教理より、結局は29法となる。法集論(p.28)では28心所が説かれ、省略されたものの心所を加え37心所だか、Nāmarūpasamāsaの「五触集の心」が欠失している。

不善心(注三)についても、善心の場合と同様に表としてあらわしてみた。「純粹語」16法のうち「区分されるもの」9法が重複して25法で「区分されぬもの」7法と合せて32法となる。「喜俱惡見相応有行」については二住の見が欠失し、「喜俱惡見不相応無行」(注四)に対しては邪見ものぞいたものが相応する。

実は不善心には「省略された心所」として「欲・勝解・掉挙・作意・嫉妬・慳・慢・惛沈・眠・悔」の10心所が教えられている。このうち「五不善有行心」には「欲・勝解・掉挙・作意・惛沈・眠」が、「無行心」には惛沈・眠以外の4つが生起し、「貪俱心」には慢が、「優俱」にはさらに嫉妬・慳・悔が、「掉挙俱」には勝解作意が生起するとされる。この「省略された心所」は法集論にはみられず、Vism Attasāliniには「欲・勝解・掉挙・作意」がみだせるが不定心所としての慢・嫉妬・慳・悔・惛沈・眠は未だのべられていない。この述べられなかった6心所が加えられたのは明確でないが九註時代のことであらう。

以下特色のみをのべる。

他に、「異熟心」の相応心所としての「作意」は法集論にみられず、Vism 以後に加えられており、この Vism. には「作意」が明確に別立されているが Nāmarūpasamāsa では心に相応する心所10法としてあげられているが「純粹語」といわれるものにはあげられていない。これは作意と心を混同しているためと考えられる。また「眼界」ではVism. p.471は触・思・命・心止(cittatthiti)作意(これは五識に相応する)及び尋・伺・勝解の8法と「喜俱」では喜を増した9法が相応するとされている。

Asl. p. 213 では Dhs. p. 91 の触・受・想・心・尋・伺・捨・一境性・意根・捨根

・命根に勝解と作意を加えている Vism. の心止(cittatthiti)は心一境性と同じようなものであるが、これら二つの心、心所相応論の系統はちがっていると考えられる。この心止には受・想・定が摂せられているわけである。

以上のように詳細に分類された心と、その心に相応して結合せる心所との関係をこれほど明確にしたものはあまりみられない。

Nāmarūpasamāsa は「心の分類」「心心所相応論」につづき「色論」を説いている。これは構成の上で、いかに認識論を扱うかという一つの姿勢を示しているものといえる。ここでのべられている色は27色であり、その分類については Saccasanhēpa とつづるものである。この色については必ずしも Saccasanhēpa と一致していないが、その系統の由来を説明すべきものとして非常に有効である。この「色論」については Nāmarūpasamāsa のみで説明することはできず、Saccasanhēpa 及び Rūpārupavibhāga etc. とともに説明すべきものと考ええる。

さて、Nāmarūpasamāsa はその内容からみても明らかのように、単独のものとしては、「心」にはとんどのものをきいており、色とのつながりは付説されているにすぎない。この色と心のつながりを明確にするには、他の *anūka* との関係を明確にせねばならない。これは九註をはじめとして *anūka* を一連の哲学的展開としてとらえて、その哲学的構成を明確にしてゆくことによつて、ようやくその全ぼうが解明されてゆくことになるのである。今日、ここに発表したのはこの研究の一端としてのもので、以後、仏音以後の哲学展開を把握する作業をつづけてゆきたいと思つてゐる。なお、参考として左記の表をあげておく。

(注一)善心所の十七集(カテゴリー) (Tasi)

- (1) 五触(集)―触・受・想・思・心
- (2) 五禅―尋・伺・喜・楽・心一境性
- (3) 八根―信根・精進根・念根・定根・慧根・意根・喜根・命根
- (4) 五道―正見・正思惟・正精進・正念・正定
- (5) 七力―信力・精進力・念力・定力・慧力・慍力・愧力
- (6) 三因―無貪・無瞋・無癡
- (7) 三業道―無貪欲・無瞋恚・正見
- (8) 二世間護―慍・愧
- (9) 六つの一対の集(身・心)輕安・輕快性・柔軟性・適業性・練達性・端適性

- (10) 二資助―念・正知
- (11) 止観―寂止・観

(1) 二つの精進と寂止—勤励(策励)・不散乱

ここに略された心所が

中捨・勝解・作意・意欲

の四心所で、これを加えて60心所となる。

(注二)「喜俱智相応無行」

△純粹語▽

三十法—触・受・想・思・心・尋・伺・喜・心一境性・信精進・念・慧・命根・

慚・愧・無貪・無瞋・身輕安・心輕安・身輕快性・心較快性・身柔軟性

・心柔軟性・身適業性・心適業性・身練達性・心練達性・身端適性・心

端適性

この30法はまたカテゴリー分類 (tāsi) によつて

△区分されるもの▽

(1) 心—心(五触)・意根(八根)

(2) 尋—尋(五禪)・正思惟(五道)

(3) 信—信根(八根)・信力(七力)

(4) 慚—慚力(七力)・慚(二世間護)

(5) 愧—愧力(七力)・愧(二世間護)

(6) 無貪—無貪(三因)・無貪欲(三業道)

(7) 無瞋—無瞋(三因)・無瞋恚(三業道)

(8) 受—受(五触)・樂(五禪)・喜根(八根)

(9) 精進—精進根(八根)・正精進(五道)・勤励(二精進寂止)・精進力(七力)

(10) 念—念根(八根)・正念(五道)・念力(七力)・念(二資助)

(11) 定—一境性(五禪)・定根(八根)・正定(五道)・定力(七力)・止(止觀)

・不散乱(二精進寂止)

(12) 慧—慧根(八根)・正見(五道)・慧力(七力)・無癡(三因)・正見(三業

道)・正智(二資助)・觀(止觀)

。決定で略されたもの—勝解・中捨・作意・欲

。不定で略されたもの—悲・喜・正語・正命・正業

(注三)不善心所の九集(カテゴリー)

(1) 五触(集)—心・受・触・想・思

(2) 五禪—尋・樂・心一境性・伺・喜

(3) 五根—意根・喜根・精進根・定根・命根

(4) 四道—邪思惟・邪見・邪精進・邪定

(5) 四力—無慚力・無愧力・精進力・定力

(6) 二因—貪・癡

(7) 二業道—邪見・貪欲

(8) 二蘊—無慚・無愧

(9) 三残余—策励・寂止・不散乱

(注四)「喜俱惡見相応無行」

△純粹語▽

十六法—触・受・想・思・心・尋・伺・喜・心一境性・精進根・命根・邪見・無

慚・無愧・貪・癡

△区分されるもの▽

(1) 心—心(五触)・意根(五根)

(2) 尋—尋(五禪)・邪思惟(四道)

(3) 邪見—邪見(四道)・邪見(二業道)

(4) 無慚—無慚力(四力)・無慚(二蘊)

(5) 無愧—無愧力(四力)・無愧(二蘊)

(6) 貪—貪(二因)・貪欲(二業道)

(7) 受—受(五触)・樂(五禪)・喜根(五根)

(8) 精進—精進根(五根)・邪精進(四道)・精進力(四力)・策励(三残余)

(9) 定—心一境性(五禪)・定根(五根)・邪定(四道)・定力(四力)・寂止と不

散乱(三残余)

説一切有部の一問題点

梶 田 善 夫

阿毘達磨研究を始める為には、まず部派仏教史を明確する作業から始めなければならないのであるが、説一切有部の歴史の中で最も困難な問題として時代と地域が変われば思想が変化する、言い換えれば時間と空間の変化を考慮した中で説一切有部思想史の開明に取り組まなければならない点をあげることができる。

その一つと言えるのが、カニシカ王統治下の西北インドを中心とした説一切有部のカシュミール学派とガンダーラ学派の相違である。そしてこの二学派の教学における相違は、後世の世親(Vasubandhu 400~480)の阿毘達磨俱舍論(Abhidharma-koshaśāstra)にそれに対立した衆賢(Saṅghabhadra~450)の阿毘達磨順正理論と